別紙１

２０１９年9月１９日

報道各社御中

東京都立松沢病院
院長　齋藤　正彦

東京都立松沢病院創立記念行事について（ご案内）

拝啓、貴社におかれましてはますますご清栄のこととお喜び申しあげます。

平素は格別のご高配を賜り厚く御礼申しあげます。

東京都立松沢病院は、1879 年、上野に創立された東京府癲狂院に始まり、1919 年に、旧荏原郡松沢村に移転して松沢病院と改称して今日に至ります。本年 2019 年 11 月 7 日には、創立 140 周年、松沢への移転 100 周年を迎えます。

この機会を利用して、日本の精神医療の歴史を振り返り、現在の課題を整理し、これからの日本の精神医療の方向性を考えるために、記念行事を企画することとなりました。つきましては、できるだけ多くの方々にご参加いただきたく、お知らせ申し上げる次第です。

この間の松沢病院の歩みは、日本の近代的な精神医療の歴史と重なります。特に、1919 年、当時、巣鴨から松沢への移転を指揮した呉秀三院長は、薬や治療方法のないこの時代に、患者が農作業を行いながら病を養うコロニー式病棟群を建て、新しい精神医療を展開しました。呉が新しい病院の基礎に置いたのは、精神障害者を監置の対象としてではなく、一人の生きる人として処遇しようとする精神でした。呉は、当時、病院中で行われていた身体拘束を廃し、隔離室の使用を制限し、看護者への教育を徹底して、精神障害者に対する作業療法や音楽を通じた情操教育を実施しました。その後、マラリヤ療法、インシュリンショック療法、ロボトミー手術、電気けいれん療法、向精神薬の登場による薬物療法等が導入されてきました。

呉秀三から 100 年、今日なお、統合失調症を主とする精神疾患に対しては、十分な治療方法が発見されないままです。日本には、他の OECD 諸国に比較して多くの精神科病床があり、在院日数が長いという批判は相変わらずです。厚生労働省の調査では、日本中の精神科病床で保護室隔離や身体拘束が頻繁に行われています。精神障害者が生きにくい社会であることは、100 年前も現

在も変わらないような気さえします。
松沢病院では 2012 年以降、拘束を減らし、入院患者の隔離をやめ、スマホの持込も可とするなど、患者への制限を大幅に見直す取り組みを続けてきました。2012 年、夜間、休日に自傷他害の恐れを理由に緊急措置入院する患者のおよそ 70%が入院時に拘束されていましたが、2016 年にはその割合が 2%まで激減しました。平均在院日数は、過去 10 年の間に 120 日から 60 日まで半減しました。一方、松沢病院は他の公立病院と同様、厳しい経営状況にあり、その改善を迫られています。

精神医療を取り巻く情勢も大きな変化の中にあります。認知症の激増に加え、発達障害、いわゆる新型うつ病、学校や職場の不適応、ゲームやギャンブルへの依存など、伝統的な精神医学の対象から外れた精神的トラブルが支援の対象となり、精神科の医療は、もはや特別の病気を持つ人のためだけのものではなく、文字どおり、誰でもが経験するかもしれない人生のエピソードへの対応の手助けをするという役割を期待されるようになりました。こうした時代の流れにも、私たちは適切に対応していかなければなりません。
創立 140 周年、松沢移転 100 年を記念し、松沢病院では三つのイベントを企画しました。その中でも核となるのが、11 月 7 日の創立記念日に行う講演会です。ここでは、松沢病院の歴史を振り返り、現在を論じ、これからの 100 年に私たちが進むべき道について展望したいと思います。
つきましては、報道各社におかれましても、これらの記念行事についてご取材をお願いし、これからの日本の精神医療を切り拓こうとする私たちの試みに、ご理解、ご鞭撻をいただきたいと考えております。